



「東の天竜、西の柏原、荻」と評された  
難工事「荻柏原井路」開削に生涯を捧げた人々



**垣田幾馬** 柏原村書記、収入役、助役、村議会議員、村長歴任

# 父小八郎の志を引継いだ か き た い く ま 垣田幾馬

■1868年(明治元年)～1934年(昭和9年) 行年67歳

## とその仲間たち



**工藤祐鎮**

嘉永2年(1849)生、  
大正3年(1914)逝去、  
行年63歳  
初代荻村長他2村長、  
大分県議会議員歴任  
父小八郎の協力者



**後藤哲彦**

安政3年(1856)生、  
大正7年(1918)  
逝去、行年63歳  
第2代荻村長  
父小八郎、幾馬  
の協力者



**矢野又次郎**

広島県尾道市出身  
沖縄県での油田開発  
山口県での鉱山開発  
熊本県での耕地整理事業  
幾馬に協力し、柏原荻耕地整理  
組合の井路開削、経営に従事

### ◆垣田幾馬の生涯と井路建設◆

年号	元号	年齢	できごと
一八六八	明治元年	0	垣田小八郎の長男として誕生
一九〇五	明治38年	37	家督を相続、柏原村長に就任
一九一二	明治45年	44	父 小八郎 没
一九一四	大正3年	46	柏原荻耕地整理組合の設立が認可
一九一五	大正4年	47	柏原荻耕地整理組合設立総会開催
一九一六	大正5年	48	組合長に就任(不認可)
一九一七	大正6年	49	贈取賄事件に巻き込まれる。
一九一八	大正7年	50	疑いが晴れて釈放される
一九二〇	大正9年	52	組合長に就任
一九二一	大正10年	53	水使用並びに工事施工の許可を申請
一九二二	大正11年	54	水使用並びに工事施工の許可を申請
一九二二	大正11年	54	農商務省特別低利資金第一回分二〇万円が
一九二二	大正11年	54	日本勸業銀行からおりる
一九二二	大正11年	54	起工式を柏原小学校で挙行
一九二二	大正11年	54	第一幹線一七、六四〇m着工
一九二二	大正11年	54	第二幹線一一、三二六m着工
一九二二	大正11年	54	通水式
一九二二	大正11年	54	第一号ため池竣工
一九二二	大正11年	54	(貯水量八万トン 工費六四、〇九〇円)
一九二二	大正11年	54	通水記念碑建設
一九二二	大正11年	54	垣田家破産宣告
一九二二	大正11年	54	第二号ため池竣工
一九二二	大正11年	54	(貯水量三万トン 工費二六、九五〇円)
一九二二	大正11年	54	第三号ため池竣工
一九二二	大正11年	54	(貯水量五万トン 工費六四、九七二円)
一九二二	大正11年	54	六六歳で死去

# 萩 柏 原 井 路 も の が た り

## 登場人物



### みどりちゃん

みどりちゃんは、郷土の歴史に興味を持った女の子です。今日は、郷土の偉人“垣田幾馬”について勉強することにしました。

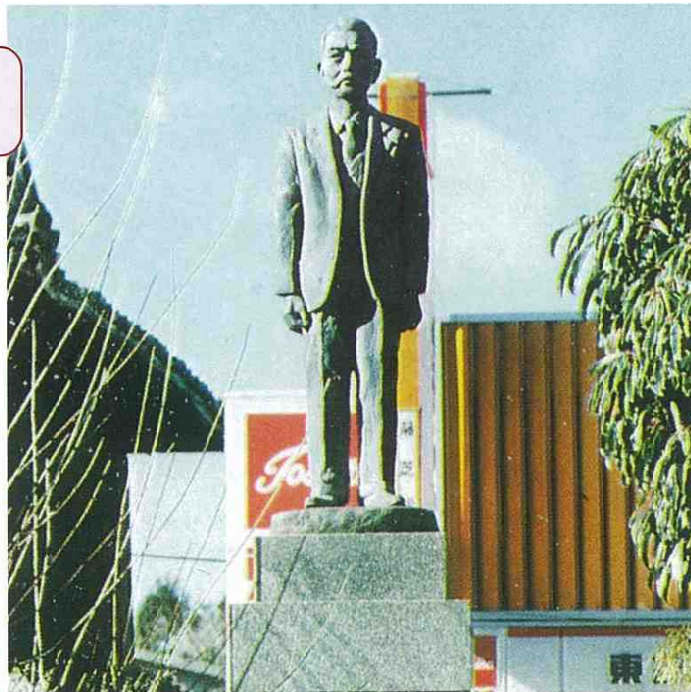


### 水士里博士

水士里博士は農業水利の歴史にくわしい先生です。

今回は、県有数の畑作地帯となった大野川上流地域の基礎をつくった人々の苦勞とその偉業を紹介します。

垣田幾馬さんって  
どんな人だったの？



【昭和45年建立】  
垣田幾馬の像



垣田幾馬は、明治元年（1868）8月29日、垣田家の長男として生まれたんじゃ。

幾馬の生まれた垣田家は、足利尊氏の流れをくむ名家で田畑36ヘクタール、山林原野は柏原村の半分にも達する広さを所有する大庄屋だったんじゃ。

幾馬は幼名を惟道と言って、少年時代は竹田の赤座弥太郎の塾に学び塾頭をつとめていたんじゃ。

お父さんの小八郎が病気になると、柏原村に帰って、明治38年（1905）お父さんが隠居したんで家を継ぎ、同じ年、選ばれて柏原村長に就任したんじゃ。

その後、萩村長の後藤哲彦らと「東の天竜、西の柏原、萩」と評されるほど難工事であった萩柏原井路開削工事の先頭に立って奮闘努力することとなったんじゃ。

幾馬は、厳格几帳面、真面目一方の人で「誠心誠意」という言葉が口癖で、三人の子供たちには「人から後ろ指をさされるような事をするな」とよく戒めていたそうじゃ。

八字ひげの威厳ある風ぼうだったからちょっと寄りつきにくい面もあったが、心の優しい人だったんじゃよ。

# 荻 柏 原 井 路

荻原、荻は  
昔どんな所だったの？



荻原、荻は三原（荻原、恵良原、葎原）と言って、江戸時代から明治にかけて、村内を流れる大谷川、岩戸川、滝水川の川沿いに僅かに日んぼがあるだけで、土地は畑と山林原野で、村人は火山灰土のやせた土地に陸稲、とうもろこし、大豆、菜種等を作って生活していたから暮らしはとても貧しかったんじゃ。

田んぼを造るため水を引くにも、田んぼより川が低く、人や家畜の飲み水さえ、谷底から牛馬の背か、人の肩によって担ぎ上げるか、深い井戸を掘るほか方法がなくて、水路開削など普通の人たちにとっては夢のまた夢だったんじゃよ。





水源の一つ【白水の滝】

井路開削は幾馬さんがはじめてだったの？



幾馬の前にも挑戦した人たちがいるんじゃないよ。  
最初が熊沢蕃山なんじゃ。

300余年前の江戸時代、岡藩主の中川久清公は万治3年（1661）、岡山藩の陽明学派の儒学者で技術官、林業、畜産、特に土木に卓抜した熊沢蕃山を政治顧問格として招いて、萩、柏原の“高原”開墾を進めさせたんじゃが、大失敗に終わったんじゃよ。



次ぎに挑戦したのが工藤祐鎮らなんじゃ。

工藤祐鎮、幾馬のお父さんの垣田小八郎、後藤哲彦らは長年温めてきた開田の夢を叶えようと立ち上がったんじゃ。

明治23年（1890）、知事に普通水利組合設立を願い、翌年認可を受け、着工のはずだったんじゃが、なかなか請負者が決まらず、決まっても工事費の工面が出来ず、当時郡長だった滝義弘（滝廉太郎の父）も協力したんじゃが着工できなかったんじゃよ。

この間、請負者探し、金策、地元の取りまとめなど気苦労は大変なものであったんじゃがついに叶わなかったんじゃよ。

幾馬はお父さんの夢を叶えようとしたんだね？



そうなんじゃよ。

お父さんの志を継いだ幾馬は、萩村長の後藤哲彦と再三協議を重ね直入郡長の小野秀胤の援助を受けて明治41年（1903）県に支援を願い、翌41年1月より野田洪喜主任技師による測量が始まり43年12月に全線の測量を終えたんじゃ。

当時の千葉知事の視察激励に意を強くした幾馬は、明治45年（1912）柏原萩耕地整理組合の設立を県に申請し、村長を辞して、その熱意が実り大正3年（1914）に設立認可がおりたんじゃ。

翌4年1月24日、柏原小学校での、柏原萩耕地整理組合の設立総会で、組合長に後藤哲彦、副組合長に垣田幾馬らが選ばれたんじゃ。

その後、水源地となる熊本県野尻村から水利権を得て、大分、熊本両県の水使用並びに工事施工許可の取得などを進めていったんじゃが、肝心の資金調達が思うように進まず7年の歳月が夢のように去ったんじゃよ。



【大谷ダム】～直下に水を取り入れている「轟の滝」がある。





お金を集めるのが大変だったんだね？

そうなんじゃ。

幾馬は、金策に走り回っていた頃、妻子に「垣田家の全財産を失うとも事業は絶対に中止せぬ。その時は妻は里に帰し子供は親類に預けて首に袋をかけて（乞食をして）でも続ける覚悟である。」と話していたそうじゃよ。



それからどうなったの？



水がなく生育は不安定であった。

そんな時、幾馬は開削事業に深い理解と経験を有する広島県尾道市出身の矢野又次郎に大正10年3月、熊本で会い、大事業の経緯と現状を話して協力を求めたんじゃ。

矢野又次郎は大いに共鳴し、調査を行い工事を引き受けてくれ、幾馬の後を継いで組合長まで務めたんじゃ。

難関であった資金調達も、その労苦が実を結んで目途がつき、大正11年（1922）10月14日、起工式が柏原小学校で盛大に挙行されたんじゃよ。



工事はうまくいったの？



当時のトンネル工事(当時では画期的工事方法)



◆工事概要◆

第1幹線水路	.....	17,640m
第2幹線水路	.....	11,313m
畑地の水田化	.....	700ha
水路延長	.....	190km
トンネル	.....	171カ所
架橋	.....	7カ所
サイフォン	.....	5カ所
暗渠	.....	103カ所
貯水池	.....	3カ所
総工費(完了時)	.....	300万円



大正12年1月、第一幹線水路、大正13年1月、第二幹線水路がそれぞれ着工したんじゃ。大谷川の岩を掘り抜くトンネル工事が大変で、又次郎は轟滝から取水し、小型発電所を建設し、我が国で初めて電気削岩機を使用したんじゃ。

工事は、8台の削岩機を使って、2交代で昼夜徹してトンネルを掘り進んだんじゃ。

そして、この水力発電は後に萩柏原両村の家庭用電力を供給することにもなるんじゃよ。

工事現場には1日800人の人夫を投入し、50カ所の隧道（トンネル）を同時に着手して、1か月30万本のダイナマイトを使用したそうじゃよ。

又次郎らは誠心誠意、粉骨碎身の努力をして、大正13年7月、第一幹線水路11km余が完成し、柏原村の62町歩が開田され、翌大正14年12月には第一幹線水路の大部分が完成し、萩村の160町歩が開田され、さらに大正15年5月には全線通水され、378町歩が開田されたんじゃ。

奥さんも大変だったろうね？



幾馬の奥さんのタケさんは心のやさしい人でな、測量に来た人たちの宿をおとずれて、寒い所に来たのだから暖かくしてあげてくれと頼み、布団を届けさせたりいつも気配りをしていたそうじゃよ。

働く人たちは？



そうじゃなあ。

工事にあつた矢野又次郎はその当時のことをこう回想しているんじゃよ。



中央列右より3人目が垣田幾馬

### “矢野又次郎の追懐”



水路開削当時、水源地近くの下山部落に工事事務所を置いた頃、なんといつでも、いちばん困ったのは物資の供給であった。

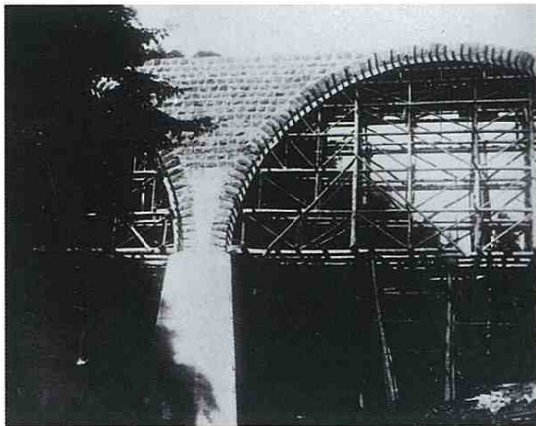
米塩はもとより野菜に至るまで7里半（30km）の道を竹田まで買いに行かねばならず、漬物類はわざわざ大分に買いに行った。

竹田から柏原まで五里の道はどうか馬車の通行が出来たが、それから先は馬の背だけが唯一の交通手段だった。その馬がどれほどの物を運ぶかという、山また山の険しい道であったため1丈2尺（4m）の鉄筋も2つに折らねば途中のカーブがまわれず、米俵も2つに分けて鞍に乗せて運ぶほど、

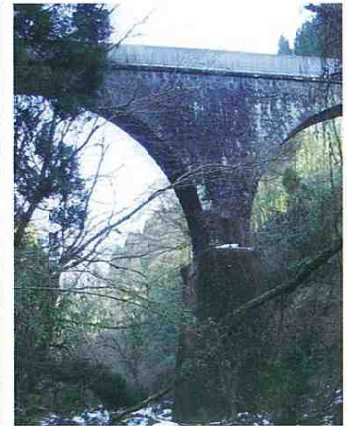
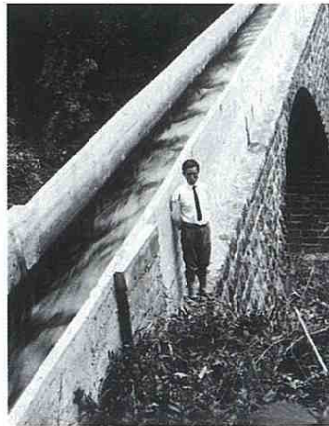
工夫たちが一日の疲れをいやす酒でも六升樽4本しか乗せられず、たびたび酒が途絶えて工夫たちが騒ぎ出す始末であった。

こんな不便な土地に800人もの人を動員したのであるから、物資の確保だけでもかなりの労力をついやした。

【大分新聞掲載】



建設時の八屋掛橋（アーチ形の高い橋脚が特徴）



現在の様子



完成した時お祝いしたの？

よく晴れた大正15年11月7日、新しく出来上がった組合事務所庁舎の竣工式も兼ねて、通水式を事務所前で盛大に行ったんじゃ。

幾馬は、ほぼ完成の見通しがついた大正14年（1925）組合長を矢野又次郎に譲って勇退していたんじゃが、羽織袴でタケ夫人を伴い出席し、谷を渡り口をくぐって来た泥水を水路に飛び降りて両手ですくって感涙にむせんだそうじゃ。親子二代40年の長い苦闘の実が結んだ瞬間だったんじゃよ。



盛大な式典の一コマ

良かったね。その後、幾馬さんはどうなったの？

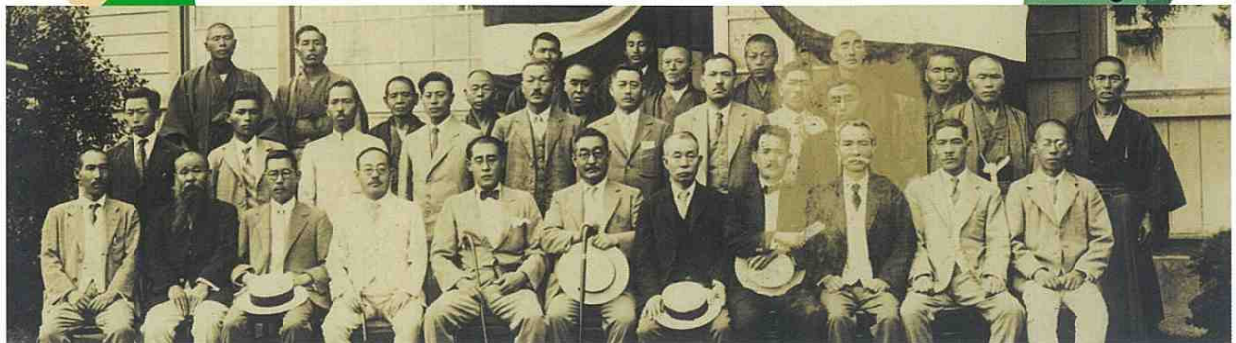
幾馬は、農民からは工事費以外の費用はまったく徴収せず、大正9年（1920）頃までの組合の借入れ金のすべてに私財をあてたそうじゃ。

このため、財産の田畑、山林原野もすべて人手に渡り、昭和3年ついに垣田家は破産の宣告を受けたんじゃ。

昭和7年1月彼は病に倒れ、わずかに残った田の水利負担金さえも払えなかったそうじゃ。昭和9年9月19日、不遇のうちに66歳でこの世を去ったんじゃが、彼の功績はみんなの心の中に生き続けているんじゃよ。これから先もじゃ。



最後は可哀そうだけど **郷土の偉人** の一人だね。



帝国耕地協会長堀田伯爵（右から7人目）農林省耕地課長有働博士（右から6人目）一行視察（最前列右から3人目が垣田幾馬）

# 水恩祭

昭和3年、耕地整理組合前(今の旧荻町役場前)に通水記念碑が農林大臣山本悌次郎の揮毫による題字を得て建設された。毎年4月10日、記念碑前で水恩祭が催され、旧荻町民は感謝の気持ちを新たにしている。



◆多くの関係者に加え、児童も参加して行われている



◆毎年行われている荻小学校児童研修会



◆開校50周年記念行事。  
2002年緑ヶ丘中学校文化祭3年劇(41人)  
「荻町水恩物語—大地の一滴—」より  
のちに全国農村振興技術連盟の  
農業農村整備事業広報大賞特別賞(第12回)